

丘橋曉夢選

新詩集  
五彩

東京

文學同志會藏版

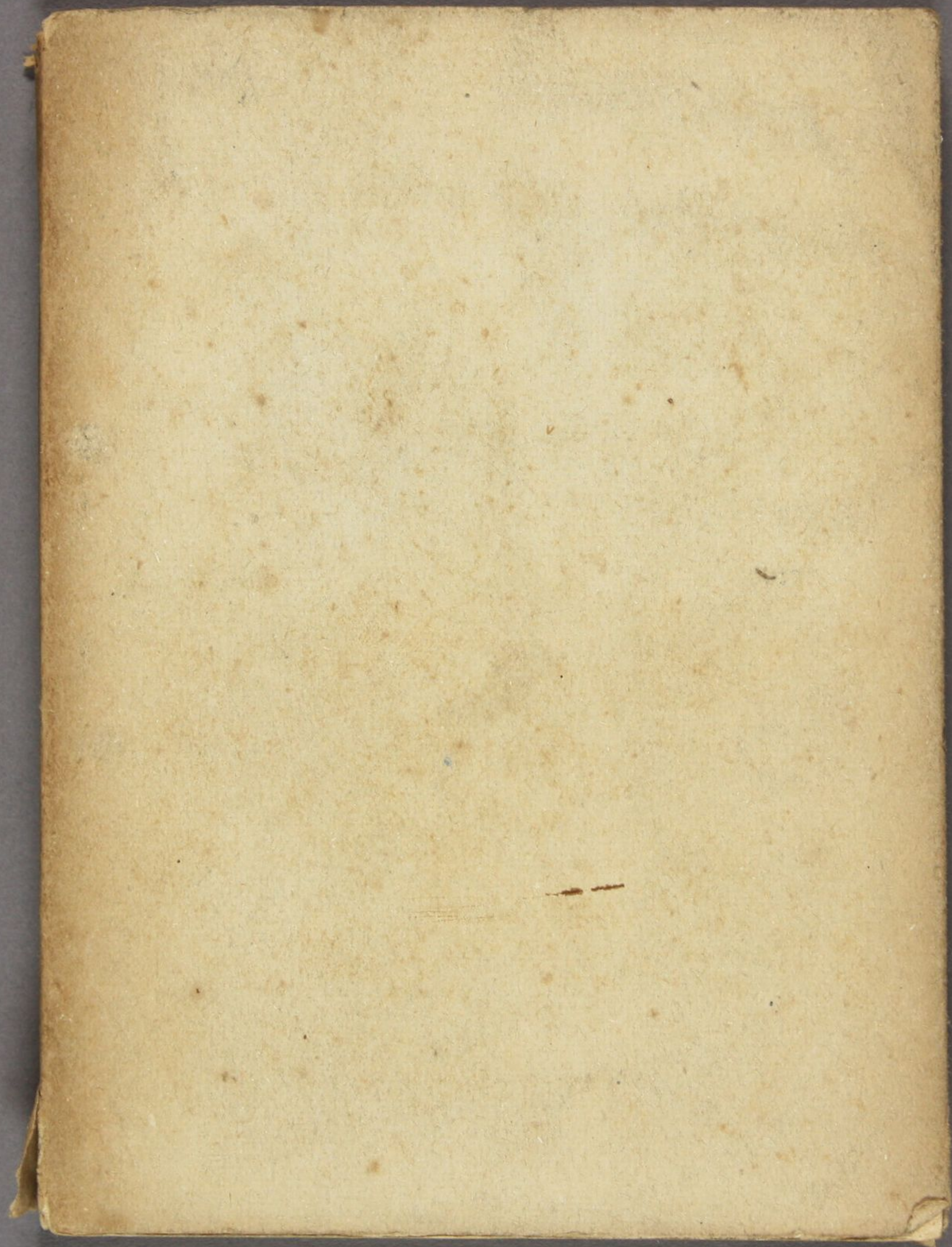




詩新  
集麗  
五  
彩  
雲

文學同志會藏版







新集 五彩雲

文學同志會藏版

丘橋曉夢選

新集 五彩雲

東京

文學同志會藏版





石橋曉夢選

新詩  
集  
五彩  
云

東京

文學同志會藏版

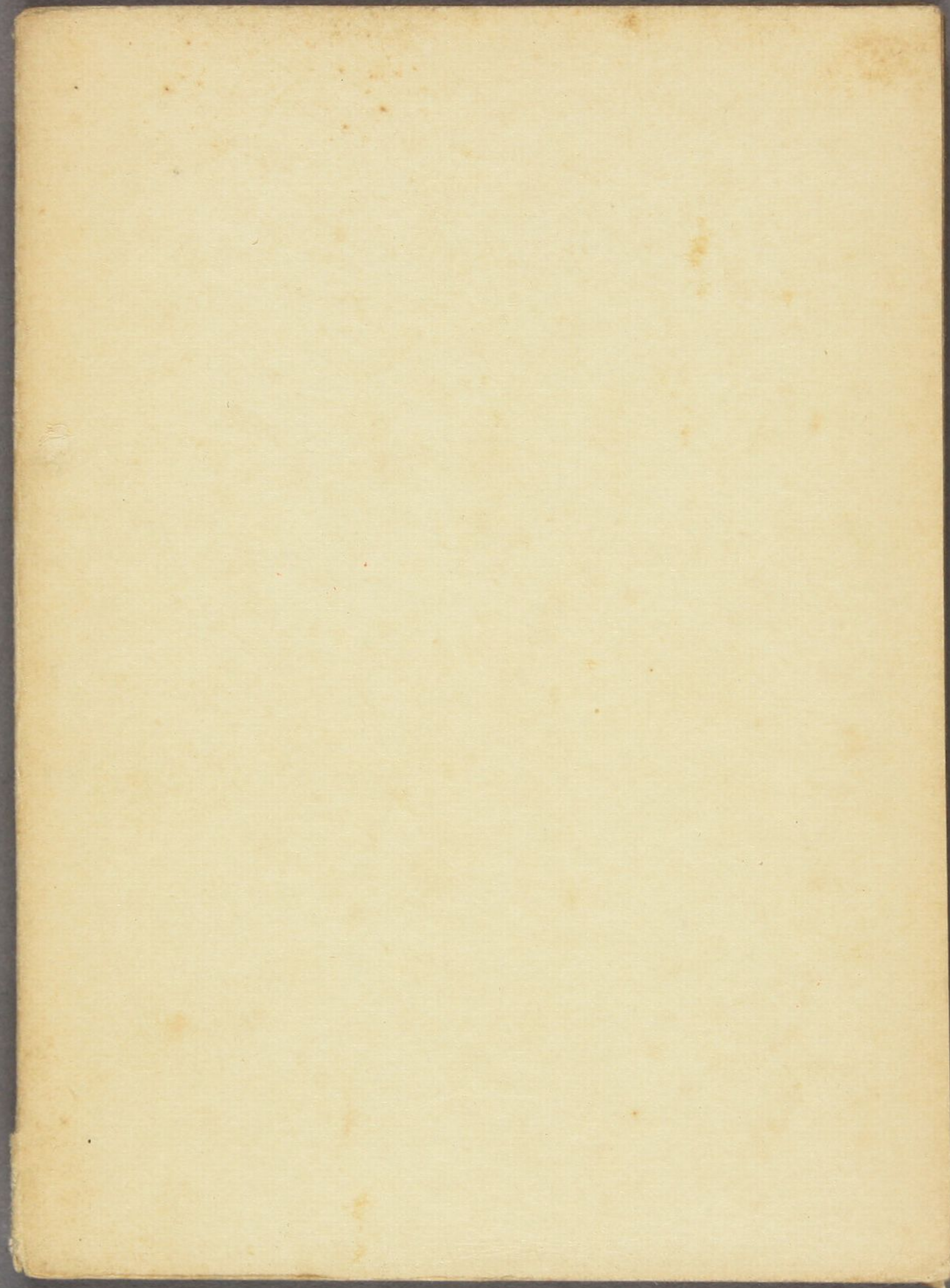


詩新  
集體

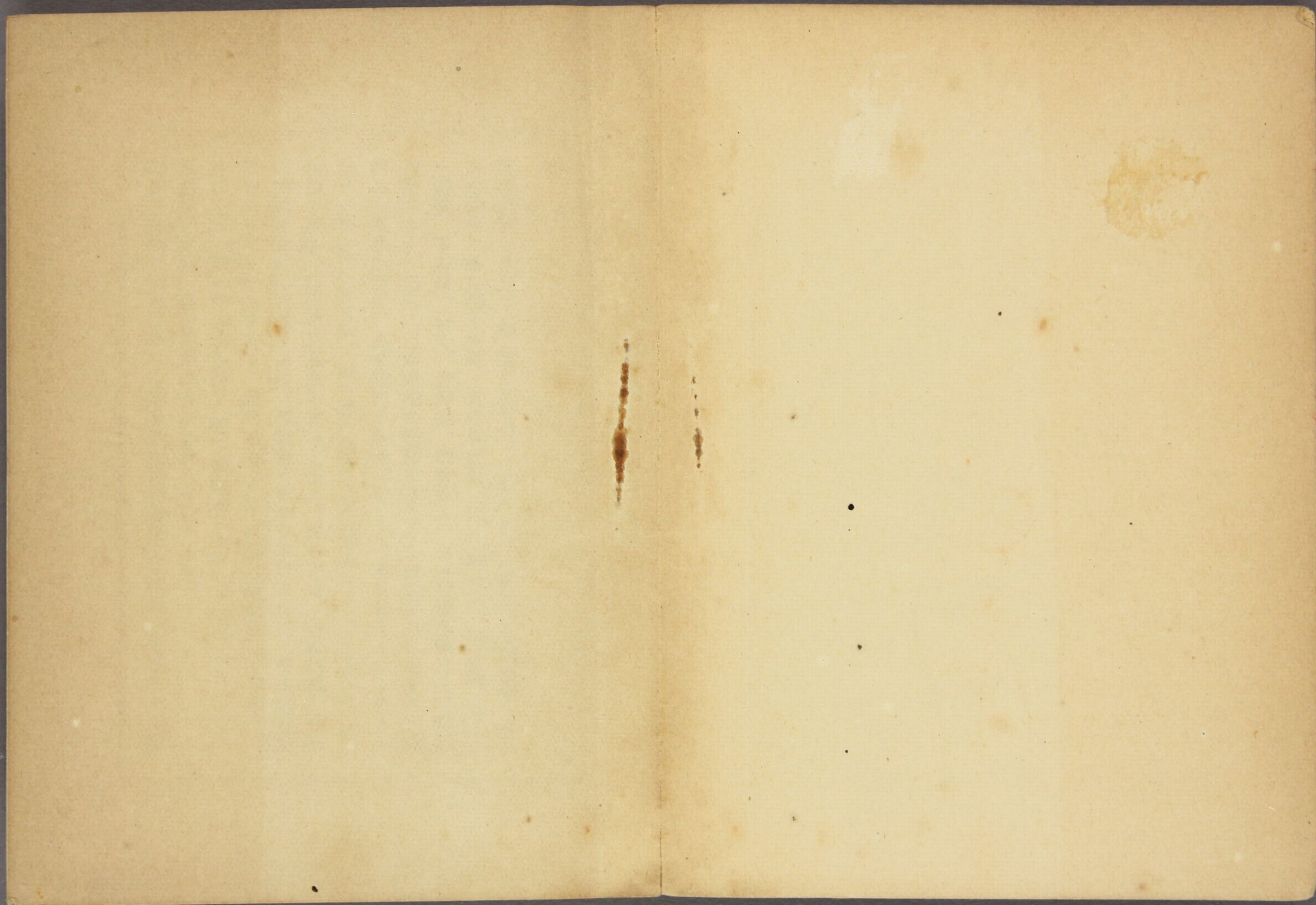
五  
彩  
雲

文學  
同志  
會藏  
版











序

詩は天地を抱括す、天地乃ち詩なり。渠のゲーテが所謂公開秘密とは、亦唯此等の事を謂ふのみ。世の學者輩、曰く、唯心論、唯物論、曰く、一神説、多神説、曰く、有神論、無神論と、各々旗鼓を戦はして辯難攻撃するも、徒らに己が見地の窄隘なることを告白するに止まる。後世の大識學を得ば、必ず其笑ひを受けむこと、火を見るよりも明らかなり。予、茲に於てか、益々詩の徳符の崇高偉大なることを知る。咄、何物の愚か、漫に花鳥風月の友とし去る。然れども、浮華輕佻、徒らに形式の末枝に拘泥するは、亦我輩の與せざる所なれば、平生新體詩の自由を取らむとするも、學問固陋にして研鑽の日淺ければ、未だ一吟だも人を驚かすの語を得ず、實に慚愧地に入らむと欲するものあり。唯期す、精神一到、將來の大成を全うせむことを。

頃日、帝部の炎天に少しく閑日月を得、諸同人の雜作を偏纂して世の



同好者に問はむとす。題して五彩雲と稱するものは、竊かに天瑞の無邊無窮に象る、と云爾

明治三十八年初秋

晚夢生 石橋哲次郎識

### 五彩雲目次

殘花集	戸川 殘花	三
桂川(情死を吊ふ歌)		一五
花賣り並序	宮崎 湖處子	二五
水の音		二六
詠日		二七
詠天		二八
ある時		二九
失題		三〇
代自殺者作		三一
勿嘆息		三二
罪		三五
戀		三五



朔風	三六
送石橋君赴臺灣	三七
たをや女	三九
くづ籠	五七
少年	五九
磨き師	六〇
月前曲	六四
わが寫眞の上に	六五
遼東の春	六六
冬夜	六七
秋夜	六八
少女	七三
無聲琴	七三
夜嵐	七三
小林 曉波	七三

白菊	八五
名も無き蟲	八七
ほゝえみ	九二
跳躍	九四
ついした事	九六
酸漿	九八
日傘	一〇〇
宇治川集	一〇三
土曜日の夜	一〇七
こになく虫	一〇八
舞子の濱	一一〇
新縁	一一二
汐はみち又汐はひぐ	一一四
月の影	一一四
佐々木 信綱	一〇三



夢……………一二五  
 聲なき聲……………一一六  
 夜半の雨……………一一七  
 かこの鶯……………一一八  
 艸苗……………一一九  
 瀧のしぶき……………一二〇  
 鳶の川……………一二一  
 綿の床……………一二二  
 梅雨ふる日……………一二三  
 まよはぬ道……………一二四  
 海……………一二五  
 さよぎぬた……………一二六  
 陸園妾……………一二七  
 なかめするまこ……………一二八

煙火にむかひて……………一二九  
 つきぬ思……………一三九  
 昨夜の夢……………一四三  
 氷うり……………一五三  
 憂世……………一五四  
 中野逍遙をおもひて……………一六五

(完)







桂 川

(情死を吊ふ歌)

(上)

こゝは處も桂川こゝは ところ かつらがは

桂といふも名のみにて、かつら

月の都も夏なれば、つぎ みやこ なつ

木の下闇か、陰くらし。こ したやみ かげ

残 花 集

戸川 殘花



霧<sup>きり</sup>たちこめし水<sup>みづ</sup>の面<sup>おも</sup>に、  
二<sup>ふた</sup>ツの光<sup>ひか</sup>りてらすなり。  
友<sup>とも</sup>におくれし螢<sup>へたるび</sup>火<sup>ひ</sup>か。  
はた亡<sup>な</sup>き魂<sup>たま</sup>かあわれく。

思<sup>おも</sup>へば昔<sup>むかし</sup>、年<sup>とし</sup>若<sup>わか</sup>き  
男<sup>をとこ</sup>女<sup>をんな</sup>のいくたりが  
意<sup>こころ</sup>の駒<sup>こま</sup>の狂<sup>くる</sup>ひいで  
心<sup>こころ</sup>の猿<sup>まじり</sup>ねろかにも  
夏<sup>なつぐさ</sup>草<sup>くさ</sup>しげき煩<sup>ぼん</sup>惱<sup>なう</sup>に

人<sup>ひと</sup>の正<sup>ま</sup>道<sup>みち</sup>ふみ迷<sup>まよ</sup>ひ  
危<sup>あやう</sup>き梢<sup>こすえ</sup>、深<sup>ふか</sup>き淵<sup>ふち</sup>。  
あな浅<sup>あさ</sup>ましや、あさましや。

その身<sup>み</sup>の痛<sup>いた</sup>み苦<sup>くる</sup>しみは、  
ものゝかずにはあらねども、  
父<sup>か</sup>母<sup>せ</sup>や兄<sup>いろね</sup>姉<sup>ね</sup>の胸<sup>むね</sup>もとに、  
氷<sup>こほり</sup>の刃<sup>やいば</sup>あつるなり。

事<sup>こと</sup>の應<sup>むく</sup>報<sup>ひ</sup>をしのぶれば、



情に畫かく阿鼻地獄。  
あやなき闇に悽然じや、  
閻羅と見ゆる夏木立。

をりく照らす電光は、  
獄の鬼の劔にて、  
閃く光り影寒むし。  
暗き方にて細流の、  
咽ぶは黄泉の聲ならめ。  
をりしも颯然とれとしくる、

峰の嵐の身にしみて、  
覺えず肌は粟だちぬ。

川ぞひ柳さらくくと。  
髪ふりみだす姿にて  
白きは何ぞ、夏草の  
しげみのうちに見ゆるなり。

こゝは處も桂川  
造作の筆はいまもなほ、



悲惨の景色うつしいで、  
我はた冥府の人なき。

昨日も、今日も、五月雨に、  
ふりくらしたる頃なれど、  
ひそかに月の影もれて、  
死出の田長のねとづる、  
雲井はるかに見あぐれば、  
喪服てふ空のさみしきに、  
三ツ四ツおちし村雨は、

つゝみかねたる誰が涙かな、

(下)

玉銚の道は少暗し、  
たどりゆく繩手はほそし、  
松風の篋の音も、  
身にしみていとうらかなし。

現とも夢ともわかず、  
幻の境にいりぬ。  
あゆめども路をしわすれ、



たどれどもゆくてをしらず。

わがうしろ髪ひくは、誰ぞ、  
裳裙のはしを引くは誰ぞ。

いぶかしや、あないぶかしや、

人の来るけはひすれども、

眼にも視ず手にも觸れず、

かすかなる聲のみきこゆ。

枯野によわる虫の音か、  
葉末にあえぐ螢火か。

心を静めてらかゞへば、

影なる人のかたるなり。

そも愛といひ戀といふ、

ふかき意を世の人は、

さら／＼くまらず氷より

霜より冷えしそのころ。

親のゆるさぬ道芝を、

あゆむは罪としりぬれど、



二人が中の戀衣、  
 かさねし日より如何にせむ。  
 心の手もてはなるまじ、  
 きれるまじとて契約りしを、  
 眞玉、白玉、種類あれど、  
 愛に易ふべき物はなし。  
 黄金、白金、たふときも、  
 戀に代ふべきものならず。

この愛を身にしいだかば、

厭ふべき伏屋のうちも、  
 れそろしき深山の蔭も、  
 情より宮殿となりぬ。

この戀を身にしつけなば、  
 谷水も玉うつひじき、  
 枯蘆のさびしさまも、  
 ささらぎの花と匂ひぬ。

われらが罪をゆるせかし。



犠牲にとなりしは愛あひのため。

降り来る雨あめの音おと、吹ふき来る風かぜの音おと、月つきも星ほしも雲くもも沈しづみぬ。さこえし聲こゑは主觀われ的れよりなるか、客觀かれ的れよりなるか、螢火ほたるびの、またもや二ツ、あとやささ、わがゆくさきに、しらべ顔かほなる。あはれく。



花賣り並序

青邱、花賣翁を詠じて陌頭擔得春風行、美人出簾聞叫聲  
(中略)餘香滿路日暮歸、猶有蜂蝶相隨飛といふ清福は羨  
む可し艶福は人を腦殺し、之に反して、リットンはニテ  
イア嬢に悲愛の歌を唱はしめたり、  
曰く

“Ye have a world of Light,  
There love in the loved rgoices;  
But the blind girl's home is this  
house of Night,  
And i'te beings are empty noices,”



噫、妙齡の美人、目盲し、身貧しく、殘朶の薔薇花を手  
に携へて熱鬧の街路を彷徨して、賣花の歌を唱ふ。其聲  
や慘。況んや情人のあるありて、常に可憐なる胸間に、  
形影の渠と偕に往來するあるをや。恨人の情緒亂れざる  
を得んや。情界の天地も爲に數滴の涙を洩すことを惜し  
まざるべし。余は賣花翁の吟を賞すと雖も、更に盲女の  
凄慘たる情歌をば、同情の燕涙を以つて愛嘆する者な  
り。膏梁に飽き、輕裘を粧ふ人よ、街衢にニテイヤに似  
たる貧困の處女を見ることあるべし、往きて姉妹の情を  
慰めよ。

(一)

花や、はな。花をめぐすや。

淺茅生の露ふみわけて、

賤が女が手折りし、花ぞ。

花や、はな。花をめぐすや。

(二)

花はしも世にまじらひて、

浮雲の富にけがれず、

うたかたと消えてゆくべき、

榮もなし、ほまれもあらず、

(三)

春風の愛にしそたち、

秋風の義におひたちて、



色もあり、香もなつかしや。

花は美の生命なりけり。

(四)

露に染め、霞にあらひ、

白さあり、紅もあり、

かぐはしや、宜、神御衣と、

人みな言ひにける哉。

(五)

貴人も麗はしといひ、

平人も清しとたへ、

見る時のその東のまは、

罪咎の思ひもあらず。

(六)

花や、はな。花をめさずや。

賣る花は花うる人と、

天地の差別ありけり。

花や、はな、花や、花、花、

(七)

草籠に鎌とりそへて、

賤の女はあはれなりけり。



霜枯れの残んの菊か、  
春雨に散りかふ花か、

(八)

は、そばの母もなし。

兄もなし、妹もあらず。

蝶は追ひ花は笑へど

わが身には涙なりけり。

(九)

あな憎や、花をし見れば、

天地の御手に抱かれ、

白玉の露を口にし、

霞てふ衣をまとへり。

(十)

あな憎や、憎やと、花を

いく切に手折れど匂ふ、

姫百合の首うなだれて、

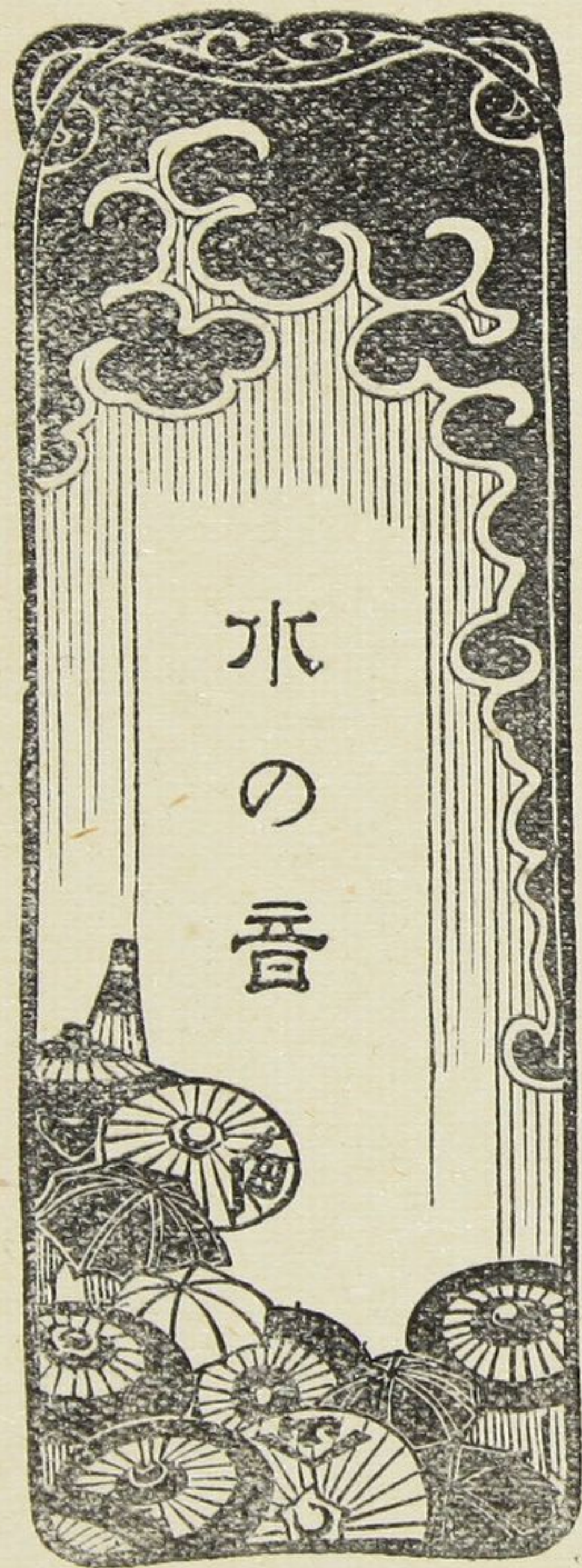
あらずはぬ姿はゆかし。

(十一)

おどや、愚、四季をりくくの

花はみな神のめぐみに





色も香も咲きいでしなり。  
花こそは人の鑑なりけれ。



詠 日

水の音 湖處子

天地あめつちの

神かみの榮さかえも

あふがれて、

豊とよさか昇のぼる

朝あさひ日子この影かげ。



詠 天

秋の夜中に まどあけて、  
 仰げば高し 天つ空。  
 さらめく星の 影みちて  
 いと尊し 神の國。



あ る 時

あが身一つに ふりかゝる  
 世のうきふしを 凌ぎかね、  
 今はと膝に ぬかづきて、  
 たすけを神に 叫ぶとき、  
 世の罪人の こゝろねを、  
 身にしみてこそ 思ひ知れ。



失題

心に懸けて 思ふほど、  
 かへりて友に 厭はれつ。  
 吾に誠の 足らざるか、  
 人のこゝろの 横しまか。



代自殺者作

命死ぬるが 罪ならば、  
 われを寛せよ 天の神、  
 とても願ひの ならぬ世に、  
 生きてあるべき うき身かは。





勿 嘆 息

嘆息ためいきつくか わが妹子いもこ、

嘆息ためいきつくな わが妹子いもこ。

その嘆息ためいきは わが胸むねに、

釘くぎを打うつなり わが妹子いもこ。

御身おんみがために 子このために、

盡つくさぬ事ことは なけれども、

素もとより足たらぬ 身みにしあれば、

いたらぬ節としこそ 多おほからめ。

いとしと思おもふ 妻子つまこゆゑ、

身みを抛すてる 吾われなれば

命いのちの有あらん その限かぎり。

更さらに盡つくさん こゝろざし。

嘆息ためいきつくな 吾妹子わがいもこ、

嘆息ためいきつくか 吾妹子わがいもこ。

その嘆息ためいきは いたづらに、



罪

世を隠れ家に一人寝て、

一人寝めたる夜をふかみ、

底まで澄めるむらぎもの、

心にひびく神の聲。

あな畏こしとおのゝきて、

枕の上に額づけば、

鏡にかけて見る如く、

吾をど殺す  
吾妹子。





戀

月の光りに

松風に

日ごろ澄ません

山人の、

おの心も 戀ゆゑに

濁るかあはれ 戀ゆゑに、



眼にうつる おのが罪。





朔 風

この霜朝しもあさの 朝あさあらし  
 いたはり知らず 思おもへども、  
 私わたくしならぬ 風かぜなれば  
 吹ふかれてゆかむ 憂うれくとても。



送石橋君赴臺灣

友ともだち多おほき都みやこをば、  
 心こころともなく出いてし君きみ。  
 雲くもの餘所よそにたゞ一人ひとり、  
 うら悲かなしくもたどるらむ。  
 かぎりも知らぬ海原うなはらに  
 しづむ夕日ゆうひを眺ながめては、  
 身みの行ゆくすゑを思おもひわび、



熱き涙もこぼるらむ。

さもあらばあれむら肝の、

心づよくておはせかし。

盡すところは神の國、

わたくしならぬ旅なれば



たをや女

湖 處 子

(上)

旅人とほる道の邊の、

秋くさむらに埋もれて、

わびしく立てる石塚は、

あはれ誰が身のおくつきか。

其おくつきをはるくも、

尋ね來りてたをや女の、



なぐさめもなく嘆くなり、  
いかなる怨ありとてか。

此處は名におふ和歌の浦、  
うら波きよく澄みわたり、  
人の心のなにとなく、  
涙ぐましき景色なり。

三年の昔年わかき、  
和歌山人のたゞ二人、

うらの宮屋に世をさけて、  
うらやまれても住ひけり。

うらの宮屋のわび住居、  
まかせぬがちの身なれども、  
浮世を戀に代へたれば、  
ともしきことを苦ともせず。

節も妙なる忍び音の、  
をりく外に漏れくるは。



わが詩を妻に歌はせて、  
己れ聞き居るものならし。

和歌山少女、白妙の、

袖ふりはへて來るときは、  
すてしうき世をかへり見て、

己れの幸をほこりにき。

照日のかげに誘れて、

手づさへ出づる其時は、

山ともいはず野とも無く、

うかれ歩きぬ、うたひつゝ。

又ある時はうらくと、

かすむ浦わの濱づたひ、

長き春日のくるゝまで、

貝を拾ひぬ、並びつゝ。

戀のすさみに或時は、

荒れたる庭を打ち返し、



苗なえのくさくさ、栽うゑつくり、  
花はなさく秋あきを待まちにけり。

かくて二人ふたりの語かたらひは、

いよ、樂たのしく見みえてしを。

思おもひがけなや其妻そのつまの、

遽はげかに見みえずなりきとは。

狂くるへる如ごとく夫せの人ひとは、

跡あとを慕したひて行ゆきたれど、

行ゆきたるかひも無なかりけむ、

歸かへりきたりぬ唯ただひとり一人。

昨日きのうの吾われは世よの人ひとの、

あやかり者ものと謠うたはれて、

今日けふは又またともあるまじき、

悲かなしき身みとはなりにけり。

(中)

貧まつしき家いへを脱ぬけいで、

乏とほしき詩人ひよに引ひきかへて、



願へる如く其妻は、  
富みたる方に嫁しにけり。

とみたるかたに嫁してより、  
世をば心に任せけり。  
絹の衣を身に襲ね、  
出るも入るも車にて、

數多の人にかしづかれ、  
數多の人に羨まれ、

世にある人のその中の、  
幸あるものと謠はれて。

爾れど妹脊の語らひは、  
唯一時の夢さめて、  
昔をしのぶ獨寢に、  
悔の八千たび百千度。

今ぞしみく思ひしる、  
世にあるかひは戀なりと。



今ぞつくく思ひ知る、  
浮世の樂は仇なりと。

猶行未はさりとももの、

たのみの糸も切れはて、  
我は十日の菊ならで、  
挿かへられぬ増花に。

せめては前の非を泣きて、  
わびんと來れば和歌の浦。

昔に返る事だにも、

今はかはらぬかたを浪。

(下)

戀しき妻の見捨て

男のうへぞ哀れなる。

有か無かと思ふまで、

絶えて外にも立出でず。

うかれ遊びし野山にも、  
渠は姿をあらはさず。



垣根かきねの千艸ちぐさあき秋あきふかみ、  
盛さかなれども出いても見みず。

人ひとは歸かへりし夕間暮ゆふまぐれ、

海うみを眺ながめて唯ただ一人ひとり、

寂さびしき浦うらに立たてりしを、

見みたりといふは實まことかも、

をりぐ軒のきを漏もれいづる、

絲いとより細ほそき煙けむりゆえ、

今いまも在ありとは知しられたり、

有あか無なかの命いのちにて。

或ある夜浦よらわの月つききよみ、

夢心ゆめこころ地にやなりにけむ、

外ほとなる人ひとを喚よぶ如ごとく、

つれなき妻つまを喚よび居ゐたり。

縁ゑにもあらぬ處ところにて、

渠かれは空むなしく成なりにけり。



身をば悔ゆれどわびれども、  
石は答へず一言も。



情も深き浦人は、  
骸を取りて葬りぬ。

旅人なりし渠なれば、  
旅人どちの憐れとも、  
見て行ためと玉銚の、  
道のゆくてに葬むりぬ。

心せまりて音になきて、  
千言百言くり返し、





く  
づ  
籠



少年

くづ籠

奥謝野鐵幹

握にぎつて寐ねたる鉛筆えんぴつに、  
蝶々てよくとまるとどけさよ、  
ちさき主人しゆじんをもち顔かほの、  
犬いぬもねむらぬ岸きしの上うへ。



ちよつきの脊をそと撫てる、  
柳の枝のいたづらに、  
むしんの片頬なにをそれ、  
夢には見たかそのえくぼ。

むくり目覺めて畫紙の上、  
なかば出來たる橋の杭、  
描かんとすれば暮がたの、  
河はいちめん沙がさす。

磨き師

むかしこひしき春雨に、  
五郎の君へ梅よりと、  
ふみの上封はしたれども。

はてなんとせん所がき、  
京の五條の烏丸、  
今も磨き師で居てほしや。



人<sup>ひと</sup>や誰<sup>たれ</sup>れ、  
 夜<sup>よ</sup>もすがら、  
 をちかへり、  
 影<sup>かげ</sup>はれて、  
 磯<sup>いそ</sup>づたひ、  
 たゞ笙<sup>しやう</sup>の音<sup>ね</sup>ばかり。  
 (笙の音きこゆ)

松<sup>まつ</sup>間の風<sup>かぜ</sup>を尋<sup>たづ</sup>ねては、  
 枝<sup>えだ</sup>をわたりて又<sup>また</sup>くだり、

月前曲

(某音楽家の囑によりて作る)

風<sup>かぜ</sup>きよく、  
 月<sup>つき</sup>あかき、  
 須<sup>す</sup>摩<sup>ま</sup>の浦<sup>うら</sup>、  
 松<sup>まつ</sup>をあき、  
 波<sup>なみ</sup>しるき、  
 あかし、  
 須<sup>す</sup>摩<sup>ま</sup>の浦<sup>うら</sup>。



風おちて、  
 月は入る、  
 あけがたの、  
 笙の音は、  
 沖のかた、  
 うす霧に、  
 消えて行く。



波間の月を探りては、  
 水をくぐりて又うかぶ。

(笙の音きこゆ)

吹く風いよよ澄みゆけば、  
 笙の音いよよ冴えまさり。  
 てる月いよよ冴えゆけば、  
 笙の音いよよ冴えまさる。

(笙の音きこゆ)



わが寫眞の上に

髭ひげがなければ威いがなくて、  
 口くちが利きかねば野暮やぼじやげな。  
 あのヒヨットコの面つらなきて、  
 いッそあることが晝ひるひなか、  
 五ご體たいそろうて有ありながら、  
 世よに歌うたよみのすたれもの、  
 この骨ほね一つせめてたゞ、  
 横町よこまちの犬いぬにくれてやろ。

遼東の春

形見かたみの上着うはぎ、血ちだらけの、  
 かくしさぐれば鉛筆えんぴつに、  
 「遼東れいとうの春はる、美代子みよこどの、  
 兄あにより」とある紙かみづゝみ。  
 中なかにはなかば萎つぼみたる、  
 すみれ、たんぽぽ、一いにぎり、  
 辭世じせいの句くをやみじかくも、  
 「土饅頭つちまんぢうせめては花はなの吹きどころ」



秋 夜

萩の花はぎちる山寺やまてらの、  
本堂ほんどう荒あれて月つきぞ洩もる。  
村むらの若わかい衆しゆが五ご六ろく人にん、  
百ひやく物もの語がたりふけにけり。



冬 夜

按摩あんま上下かみしも五百ごひやく文もん、  
聲こゑより人ひとの影かげたえて、  
辻つじの柳やなぎに一いち臺たいの、  
人じん力りきのこる塞さむさかな。





或日ひそかに渠が居間、  
 のぞいて見れば眞白なる、  
 片頬を見せてすやくくと、  
 春の晝寝の罪なさよ。  
 蓋にはみごと赤白の、  
 花をむしつて積み上げて、  
 花の底にはひとひらの、  
 母の寫真ぞ埋みたる。

少女

まき繪の硯なかならで、  
 蓋をかしてと妹に、  
 乞はれてやかて與へしが、  
 かへさずなりぬ其儘に。  
 蓋はと問へば蓋は猶、  
 貸して給べよとうつむけり。  
 母のかたみの硯箱、  
 そこなはれなば如何にせむ。



無  
敵  
琴





夜 嵐

(上)

名なのみ床ゆかしの女め夫をとすぎ杉ぎ、

一ひとつ尾を上かみに根ねざせども、

雲くもの亂みだれの葉はを茂しげみ、

枝えだは風かぜにぞへだてらる。

無 聲 琴 小林曉波



立つや、こゝにも浪風の

閨の燈に打ち騒ぎ、

夫は心に、妻は目に、

潮とも湧く 憂さ歎

情は人にかはらねど、

睦むを天道と悟れども。

縁と見れば、あまりにも

つめたき妻のそぶりかな。

我を恨みのその涙

實情なりせば、温かに

胸や燃ゆらむ。いかなれば、

やは 解けかぬる、厚氷

我 涙あり。悲しさを

人の心に汲めばこそ、

忍び 忍ばぬ いざよひに、

分かれたぬ袖を 打ち惱め。



罪ともいはむ罪もなし。

數ふばかりの咎もなし。

あゝ。絶ちがたき縁かや、

斯く苦みに瘖せつゝも。

幸無き身にか。泣く妻は、

我には添はぬ色ながら、

廣き浮世の

いづこにか、  
ゆかりの袂 匂はむを。

清き戀あり、世の中に。

濁りもやらで、我も、また

なげきは深かき 朝夕も

忘れかねてし 人のあり。

わが妻、失せよ。しからずば、

斯くもつれなき人かとして、

憎さわが身を、恨むより

せめて厭へと祈るかな。



甲斐なく過ぎし 世なりけり。

いつしか、徒に 一と年も

暮れて、思ひまゝならず。

まさるのみなる 戀の火や。

世のためしとか、くされ縁。

纏ふ羈絆の束縛を

やぶるとて、身は果つるとも、

戀に真情を見せましを。

神よ。緑を守るとは

まことか、さらば、わが爲めに。

尾上の杉に

風荒れて、根を覆へせ、枯れぬべく。

(下)

この夜に、妻はただひとり

いづくとも無く出て立ちぬ。

行衛を我に告げやらず、

それ と思をいはずして。



贈り越せしか、いづこより。

わが手に残る 文一つ。

怪しと見れば、墨の香の

はや かぐはしき筆の跡。

我は讀むなり、ほの暗き

灯影に文をかざしつゝ、

妻の筐の それなれで

さすが 哀れを いかにとて。

火影は暗く、忽ちに

また 照りまさり、消えまどふ。

心を籠めて讀むほどに、

さやに見え行く 文の文字

道ならぬ戀、わが心

罪を咎めも、したまはで、

かつくわぶる 思をも

汲みてたまひし嬉しさよ。



その嬉しさを 懐ふとき、  
露の命も 惜しからじ。  
君、此處をしも 厭はじと  
宣ふものを、いざ、さらば

幾重の山路、夜越えて、  
罪の鞭笞を、あなたなる  
鄙の果てにぞ、逃れなむ。  
お梅泡まゐる。  
とばかりに。

折から、光 打ち消えぬ。  
黒白もわかぬ 山影の  
闇黒に白刃を振りかざし、  
我を窺ふ 男あり。

怪しく立てし一と聲は、  
我か、あらずか、目覺むれば、  
針に添寝の妻も、また  
いかなる夢や 襲ふらむ。



あびゆる聲音こわね 苦し氣くるけに、  
喚おめきて展のばす 二の腕うでの、  
迷まよひの闇やみに 蒼白あはしろく、  
蒲團ふとんに落おとす 色いろほそし。

秋あきの小夜半さよなの世寂よさびしく、  
遠吠とほえ、ひゞく 犬いぬの聲こゑ。  
庭にはの枯葉かれはに 音おとするは、  
叫こゝろく神かみか。夜嵐よあらしか。

白 菊

我われに與あたへよ、 一ひとと枝えだの  
君きみが香かに染そむ 菊きくの花はな。  
咲さけるも床ゆか し、人ひとの世よの  
今いまを秋あきとも しら菊きくの。

昨日きのよの別離わかれ、 あまりに  
君きみが園生そのふの 心こゝろの残のこる 戀こいしさ  
小瓶おびんの 花はなを乞こひ、 戀こいしさ  
瓶びんの水みづに 挿さしてけり。



寢覺の涙、幾夜さの

逢はぬ恨を、わぶるまに、

今朝色あせぬ。葉がくれに、

そぐ甲斐無し、露の玉、



名も無き蟲

労働に獲ては身を養ひ、  
身を養ひて世に働く。

いと、易きこの理を

鈍くも我の悟りかね、

空は小春の今朝も、また

火鉢戀しきもの思ひ。



遊ぶか、餌をば尋ぬるか、  
窓の障子の白紙に  
名も無き小蟲、たゞ一つ  
さまよひ居るを見出しぬ、

名も無き蟲を、人の身の  
あるか、無きかの心より、  
眺め入りぬ、と神は、また  
眺めやるらむ、二個をば。

斯く思ひつゝ、我はたゞ  
愁思にはなれ、うか／＼と  
虫のまにくたどりたり。  
さやかになりしわが目もて。

いつしか、ついに 一時の  
あだに過ぎしを驚けど、  
名も無き蟲は、今も尚  
一つの小間を、行き戻り、  
倦かずもあるか、小休みなし。

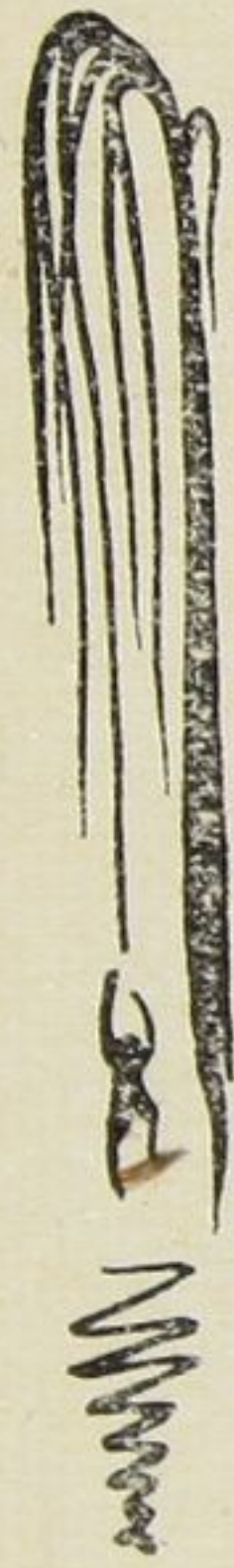


名もなき虫よ。汝は、そも  
何を緑の、いかにして  
この世に生れ、いかにして、

世をしも過ぎし、果ては、また  
いかに終らむ身なるにか。

不圖 思の浮ぶとき  
光 晃くわか心  
叫く神の聲すなり。

嗚呼。わが身は、と起ち上り、  
窓の外前を見渡せば、  
日影ほがらに 空冴えて、  
梢も高き秋の色。  
囀る聲も百千鳥。  
散るか、一と葉は 世の外に。





合あへる嬉うれしや、音ねにたゝて。

ししげせきみ人ひと目めの中なか空そらに、

逢あ瀬せ短みかちきは星ほしの

輝かくく黒くろ目め、戀こひすてふ

愛あいの女め神がみぞほほええみみぬ。



ほほええみみ

影かげは心こころに宿やどれども、

なほさやかにと、人ひと知しれず、

君きみが横よこ顔がほそと見みれば、

折をりから君きみも此こなた方たをば。

誰たれが告つげしとにあらざるを、

思おもひいかにや通かよひけむ。

四よつの瞳ひとみのゆくりなく、



跳 躍

君きみがかざしの白玉しらたまを  
まもるわが影かげ、その玉たまに  
映うつりけりな、とつく息いきを、  
頬ほに知らずやの戀人こひごとよ。

玉たまはくもりて、おくれ毛けの、  
心こころありげに ゆらげるを、  
衣縫きぬぬいふ針はりの いそげるは

何なんの思おもひを運はこぶらむ。

あはれ。わが身みを迸はしり出いで、  
君きみがろそぐ溜息ためいきの、  
黒髪くろかみ長ながくもゆるとさ、  
おどるを思おもへ、戀神こひがみの。



そとそとそと



ついでした事

「ついでした事」と、一と筋に

幼き乙女詫ぶれども、

さりとも肯かぬ母親は

繼の間にやあるならむ。

憎しと見れば、其のおもわ、

「虫も殺さぬ」 諺の

はり言を今優姿

さては。由縁の果ての身か。

「ついでした事もいく度ぞ。

ほんに 強情のこの子や。」と

呟く襟に落たりな、

つめたき雫斬ばかり。





酸 漿

朧月夜の果敢無くも、

君と悟らで過ぐべきを。

耳に囁くほづきの、

音より知れたる嬉しさよ。

我に聞かせむためにとて、

今しも、君は鳴らせしか。

されど、わりなく、他人の、

床かしと聞かばいかにせむ。

君よ。さばかりやさしくば、

つたなくも吹け。我は、たゞ、

君なることの嬉しきに、

聞きわくひまもあらぬなり。

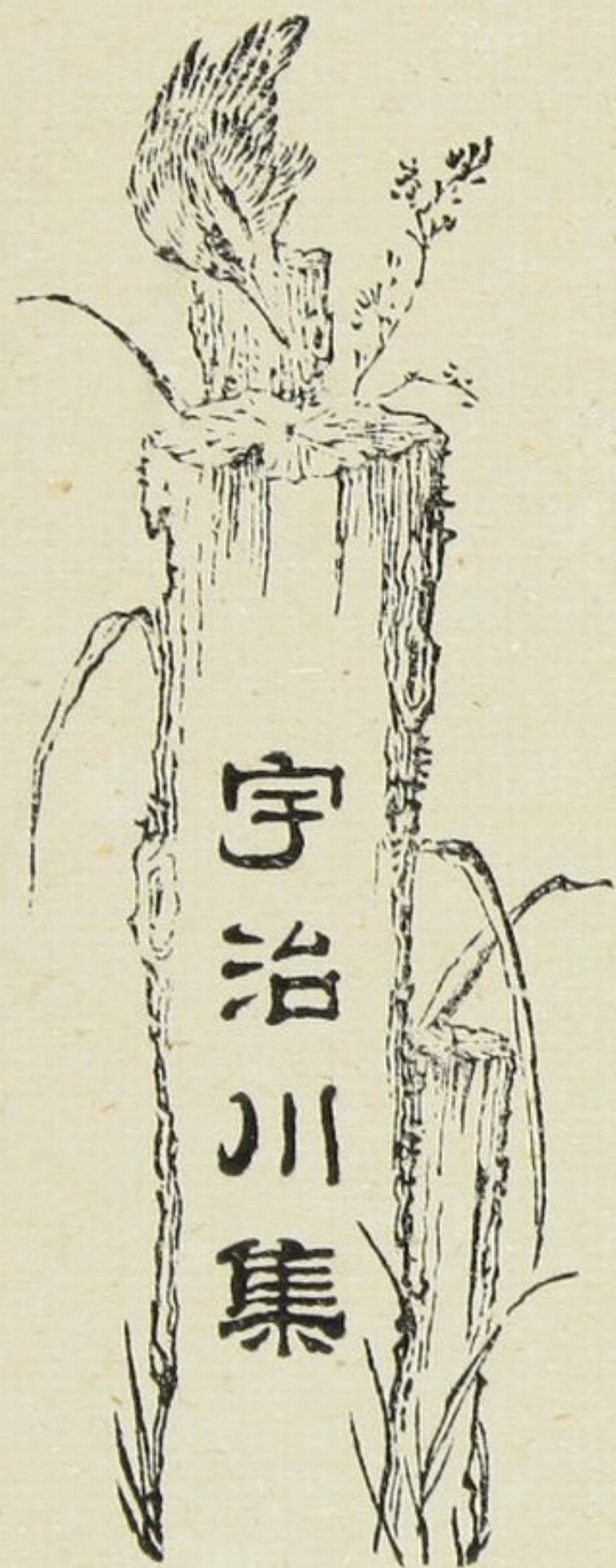




日 傘

たをやめの

ほこるおもわの見せたさを、  
 つゝむ 蝙蝠傘色にいてゝ、  
 行き交ふ 我の夏あつし。  
 真紅の扱帯日は射して、  
 燃ゆる思のやどるかな。



宇治川集



土曜日の夜

宇治川集

佐々木信綱

おのが無學むがくの くやしさに、  
 せめて一人ひとりの わが子こはと、  
 學まなばせし子こが こよひ又また、  
 書よみよむ聲こゑを さかなにて、  
 明日あすは休やすめと くむ酒さけは、



妻は針をば 手にとりつ。  
 あす日曜の 遠足に、  
 ゆかむわが子の 爲にとて、  
 ぬふや袴の ほころびに、  
 深きなさは こもるらし。  
 家は貧家の狭けれど、  
 雨露をしのぐに さはりなく、  
 身は職工の いやしきも、  
 人にたよらん 思ひなく、

味いかに まさるらむ。  
 機械の音の たゆみなく、  
 耳かしましさ 中にて、  
 石炭の火の たえ間なく、  
 もえたつ前に 業とりし、  
 かれが一日の くるしびは、  
 この一杯に 消えはてぬ。  
 酒のかはりを 打ちきて、



へつらふ心もたざれば、  
浮雲のとみも うらやまず。

人の世にある さきはいは、  
玉のうてなの 内ならず。

まことのさちは つどへたる、  
こがねにあらず 玉ならず。

まことの愛の すむ家の、  
土曜の夜は ふけにけり。

こになく虫

軒のまつかぜ 音たえて、  
籠になく虫の 聲さむし。  
ふけゆく夜半の 月影を、  
はたやこよひも ひとり見む。





舞子の濱

浅みどりなる きぬのごと、  
和ぎわたりたる 海のおも、  
海士のつり舟 ほのみえて、  
あはじしま山 いとちかし、

風のどかなる 春のあさ、  
天つをとめが おりたちて、  
波のを琴を あはせつゝ、

ひるがへすらむ まひの袖。

光さやけき あさの夜半、  
月のみやこの 宮びとは、  
この松かげに まとゐして、  
うたげすらしも よもすがら。





新 縁

木間<sup>このま</sup>をわくる 風<sup>かせ</sup>あをく、  
みどりしたる 下<sup>した</sup>かげに、  
雪<sup>ゆき</sup>をいたたく 卯木<sup>うぼく</sup>あり、  
ほゝゑみたてる うばらあり。

春<sup>はる</sup>はあゆみを とどめねど、  
野山<sup>のやま</sup>のきぬは 色<sup>いろ</sup>かへつ。  
人<sup>ひと</sup>の心を なぐさむる、

神<sup>かみ</sup>のめぐみの あまねしや。





汐はみち又汐はひく

かねはひびきて 日はくれぬ。

うすずみ色に しめりたる、

まさごの上を 旅人は、

町の方にと いそぐなり。

汐はみち又、汐はひく。

くらすは壁を おほひたり。

されども海は 聲たてつ。

砂の上なる あしあとを、

ましろき手もて 波はけす。

汐はみち又 汐はひく。

馬はいなゝき 夜はあけぬ。

日はかへりきぬ、 さはあれど、

過ぎ行きたりし たび人は、

また此岸に かへりこず。

汐はみち又 汐はひく。



月の影

ひとりながむる 大ぞらの、  
月のかげこそ さびしけれ。  
わぎもと共に みし夜半は、  
光たのしと あふぎしを。



夢

かたりし程の たのしさは、  
ゆめなりつとは おぼえねど、  
さめての後の うつゝこそ、  
又今さらに かなしけれ。





聲なき聲

聲なき聲を きしりて、  
天と地との おとづれを、  
つたふる人の 言葉こそ、  
千世にくちせぬ ものなれや、



夜半の雨

まてどもぐ 玉づさの、  
つかひはさらに 音もせて、  
更けわたりゆく 夜半の雨、  
まどをうつこそ さびしけれ、





かごの鶯

かごの鶯 うぐひす こゑおひて、  
 垣ねの卯木 うつき ちりそめぬ。  
 かくていくかに 成ぬらむ、  
 おとづれもせぬ 人ゆゑに。



艸 笛

家路 いへぢ にかへる あげまさか、  
 ふくや艸笛 くさぶえ こゑすみて、  
 くりの實 み ちつる 山 やま かげの、  
 林 はやし の梢 こずえ つきしろし。





瀧のしぶき

瀧のしぶきに おほはれて、  
岩にせかれて くだかれて、  
早きながれに うかべども、  
かげまどかなり 空の月。



蔦の門

世にいれられず 世をよそに、  
とざしこめたる 蔦の門。  
とふべき人も とひこぬを、  
こゝにもさすか 月のかげ。





梅雨ふる日

梅雨はるさめくらすき まどのもと、  
小鳥こどりのこゑも しづかにて、  
いにしへ人のひと歌うたがたり、  
ひとりよむこそ 樂たのしけれ。



錦の床

うちにいばらを つゝみたる、  
錦にしきのところに をらむより、  
吹ふきくる風かぜの さむしろに、  
むしろ我世わがよを たのしまむ。





海

したたる露つゆの 一ひとしづく、  
 落葉おちばをくいる たに川がはの、  
 ほそき流ながれも うけいれて、  
 ひろきは海うみの こゝろかな。  
 ふかきは海うみの こゝろかな。



まよはぬ道

くらきみ空そらを むらとりの、  
 雲路くもぢはるく かへるなり。  
 道みちふまよふ よの人ひとに、  
 まよはぬ道みちや をしふらむ。





さよぎぬた

ふるさと人ひとにあふとみし、  
ゆめふきやぶる 山風やまかぜに、  
旅たびのあはれを そへんとか、  
たが手てすさびの さよぎぬた。



陸園妾

あいなだのみの この春はるも、  
はやくれがたに なりにけり。  
ひとりのきにほひて ひとりちる、  
軒のきばのさくら ながめつゝ。





ながめするまに

ながめするまに 日はくれて、  
池のさどなみ 雨はれぬ。  
つゞくおはしま つりどの、  
いづこに月を 見はやせん。



湮火にむかひて

ねよとの鐘の おとたえて、  
ねよとの鐘の おとたえて、  
ちまたの犬の こゑすごく、  
春とはいへど さえかへる、  
さ夜風いたく 身にぞしむ。  
門べすぎゆく 靴の音も、  
いつしか遠く なりはてし、



ちかき市路しがいの まつり日ひの、  
物ものうるどよみ しづまりぬ。

われらふたりの すまひには、  
ひろき家いへゐを ところえて、  
こゝにかしこに こよひ又また、  
あるゝねずみの 音ねたかし。

おもへばはかな 父君ちぎみの、  
世よにいましつる 時ときはしも、

こよひの如ごとく ふけし夜よは、  
おそくおきゐて 風かぜひくな、  
身みにこゝろして つとめよと、  
やさしきこゑに のたまひき。

思おもへばかなし 母ははとじの、  
すこやかなりし 頃ころはしも、  
こよひの如ごとく さむき夜よは、  
火ひをけの炭すすを さしそへて、  
うたゝねすなと 折をり々に、



みまはりきては のたまひき。

夜はふけゆけど 情なさけある、

やさしき御みこ聲こゑ さくがたく、

火ひあけの炭すすみは 消きえたれど、

つぎと請こはん 母ははもなし。

かたへの壁かべに かたみとて、

かけつらねたる 油あぶら書かを、

ほのかにてらす 燈とも火しびも、

つきぬ涙なみだの たねにして、

たゞ一人ひとりなる おとらとは、

はや打うちふせり かたはらに。

今日けふの夕ゆうべに をしへつる、

ふみを枕まくらの もとにおき、

憂世うれよのなみ路じ よそげにも、

ゆめのうき橋はし わたるめり。

心地こゝちよげにも ねぶれるは、



まだ父君ちちぎみの ましゝとき、  
うすひの峯みねの もみぢ狩がり、  
わけつる秋あきや おもふらむ、

思おもひなげにも ふしをるは、  
まだ母ははとじの ましゝ時とき、  
由井ゆいの濱はまべに しほあみて、  
あそびし夏なつや ゆめにみる。

おもへばいとも いとほしや、

やよひがちにて 朝あさゆふに、  
かよわきなれの 身み一つを、  
つねにたのしく なしかねつ。

くれ竹たけの世よの うきふしに、  
吹ふきしく風かぜの あらくして、  
おもふとすれど 袖そでがきの、  
やれ間まおほきぞ 口くちをしき。

思おもふもわびし あはれこの、



うき世よの海うみの わたらひは、  
あらし磯いそわを ゆく舟ふねの、  
波なみにいほほに さへられて、  
よるべなぎさに 漂たぎひつ、  
そこのみるめも むつかしや。

苦くるしきおもひ なぐさむと、  
とる筆ふでとても まゝならず、  
ふけゆくまゝに いとゞしく、  
心こころはおもし 目めはいたし。

思おもふなかばの、かたはしも、  
ならで眠ねむるは いくそたび。  
あらしに夢ゆめを やぶられて、  
また筆ふでとるも いくたびぞ。

われとわが身みを はげまして、  
つかれし心こころ おこしつゝ、  
とるとはすれど とる筆ふでの、  
すゝまぬわざを いかにせむ。



つきぬ思

ふみのはやしに 分けいりて、  
 よみにしふみは いく千巻、  
 ほたるをつどへ 雪をふみ、  
 すぎにし月日は はや十年。

おもへばかひなし 幾千巻、  
 さればはかなし その十年。  
 物のことわり 知りそめて、

すきまもりくる 風さむく、  
 ふけゆく夜半の 窓のもと、  
 むかふともし火 なれのみや、  
 知らばしるらむ わがころ。





知らでもよきを なまじひに。

ことわり知らぬ 身なりせば、

かばかり思ひ みだれじを。

ことはり知らぬ 身なりせば、

かばかりおもひ まよはじを。

まなびに知りし ことわりは、

我身のあだと なりにけり。

出まじらひし 世の中は、

我身のあだと なりにけり。

世のことわりは まだしらで、

雲雀のうたう 聲きゝて、

あそぶこなたの そのかみに、

再びかへる よしもがな。

世のうき事は しらずして、

みのりよろしき 小山田を、

ながめてゑめる しづのをに、



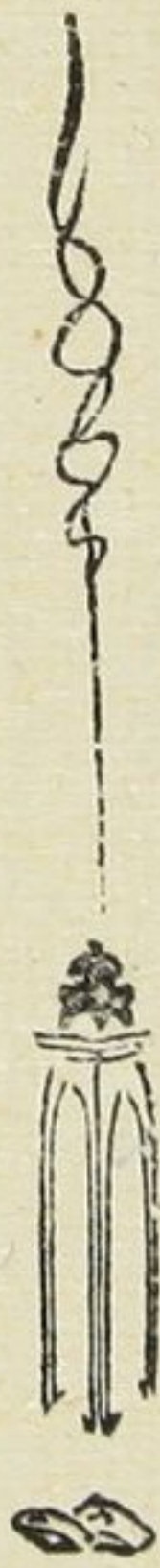
わが身みをかへむ よしもがな。

つきぬおもひに たへかねて、

窓まどおしひらき 見みいだせば、

垣根かきねのま萩はぎ はなちりて、

みそらにたかし 雁かりの聲こゑ。



昨夜の夢

門かどの小川おがはの いとやなぎ、

ながむるごとに 見みるごとに、

君きみをおくりて たゞずみし、

ことしの春はるぞ なつかしき。

とくかへりませ わがせこと、

さゝやさいへば 君きみもまた、

さらばとばかり もえそめし、



はなだの絲いとを 手てにまきて。

時ときおくれなん とさ來きぬと、

うながす人ひとの 言ことの葉はに、

ことばもなくて 見みおくれれば、

ふかくもこむる 朝あさがすみ。

うぐひすなきし 春はるの日ひも、

ほたるみだれし 夏なつの夜よも、

物思ものおもふまに とくすぎて、

君きみおもふ間まに とくすぎて。

君きみのかたみと 朝あさゆふに、

ながむる柳やなぎ 一ひと葉はちり、

二ふた葉はこぼれて ゆふ月つきの、

ひかり身みにしむ 秋あきはさぬ。

はだへにさむき 風かぜのおと、

つゞれさせてふ 虫むしの聲こゑ、

旅路たびぢのきみよ いかならん、



肩かたのまよひや いかならむ。

ふかき思おもひを 水みづぐきに、

かきながしてと 思おもへども、

わかるゝ折をりに のたまひし、

かみの詞ことばを いかにせむ。

錦にしきを着きつゝ かへるべき、

三みとせの程ほどは 玉たまづさの、

ゆきかひなさじ なさじとて、

かたみに心こころ 通とほはゞと。

君きみの御詞みことば きくときは、

みどりの野のべを 春風はるかぜの、

のどかにわたる 心地こころちして、

いなといふ事こと わすれつゝ。

われは答こたへき その折をりに、

たへがたしとは 思おもへども、

君きみのさはりと きくからは、



君きみののたまふ 事ことなれば。

あはれ思おもへば その折をりに、

いかでかかくは 答こたへけむ。

かゝるわびしき 事ことをしも、

などてかわれは 答こたへけむ。

事ことなくいますと きゝながら、

こゝろにかゝるは 昨よ夜べのこと。

思おもひあまりて 夕ゆうまぐれ、

ともに遊あそびし かの岡をかに。

のぼりて見みれば かなたより、

來きますは君きみの すがたなり。

はしりちかづき 嬉うれしさは、

言ことば葉はもいはず よりそへば、

まだうら若わかき 少せう女じよ子の、

すがるわが手てを おしのけて、

我わが夫つま來きませ こなたにと、



君<sup>きみ</sup>ひきつれて みやこべに。

はづかしさをも 打<sup>うち</sup>わすれ、

しばしまちてと 跡<sup>あと</sup>おひて、

ゆかんとすれば あやにくに、

たちたる岩<sup>いは</sup>に つまづきて。

こゝろにかゝる 昨<sup>よ</sup>夜のゆめ、

夢<sup>ゆめ</sup>はこゝろの つかれより、

跡<sup>あと</sup>なきことを 見<sup>み</sup>るものと、

思<sup>おも</sup>ふものから おぼつかた。

みやこをとめは みやびかに、

すがたやさしと きくものを。

いなく君<sup>きみ</sup>は いかにして、

さることあらむ いかにして。

あはれいたくも 夜<sup>よ</sup>はふけぬ。

ひとりおさるて かくばかり、

おもふこゝろを やよ君<sup>きみ</sup>に、



み空そらの月つきよ ゆく雁かりよ。



氷 う り

あはれなり、涼すずしさを 人ひとにうりて、  
おのが身みは、汗あせにぬれゆく 氷こほりうり。

人ひとは皆みな、暑あつけさを わぶる 比このころに、  
日ひの光ひかり、もゆるちまたを うりありく。

たが爲ためぞ、汝なれが家いへの 富とみてあらば、  
日ひざかりに、外そとには母ははの 出いたさじを。



憂 世

「身にはつゞれを 纏ふとも、  
かしづく人は なしとても、  
こゝろのまゝに 世の中を、  
わたる 楽しさ いかならむ。

憂世のきづなは つながれて、  
おもはぬ人に おもはれて、  
おもふもわびし かの人の、

望みはわれに あらずして。

おもひは我に あらずして、  
我身にそへる たからのみ、  
身のいたづきに 托づけて、  
うつろひすみし この宿に、

しばし心の なぐさめど、  
こゝもうき世の外ならで、  
風のためよりに をりくの、



言づてきくも たへがたや。

世はひろけれど 身一つの、

あきどころなき 我身かな。

心にちぎりし かの君は、

千里のほかに ゆきまして」。

聲もをりく とだえつゝ、

さこゆる歌の なつかしく、

しらべえならぬ つま琴を、

かなづる人よ たれならむ。

田の面のおくに 立つとく、

松原ごしに 海みえて、

みやこはなれし 大森の、

里わつとさきの 此いへぬ。

池のこゝろも ゆほびかに、

園生もひろく しめなして、

憂世のちりを よそげにも、



すまへる人よ たれならむ。

ゆくともなしに たゞ一人、

そゞろありきの 書つかた、

たへなる聲の ゆかしさに、

垣のこなたに たゞずめば。

「あね君來ませ 來て見ませ、

をかしき庭の はるげしき、

忘れたまはん み病ひも、

とく來てみませ 我はいま、

をかしき蝶を とらへつ」と、

をさなき人の 聲すなり。

「まさなき事を したまふな

はなち給へや その胡蝶、

思ふこずるに なづさひて、

心やさしき くてふをいと、

や、年たけし 聲しつゝ、

庭におりたつ おとさこゆ。



「今いまひきまし、あの歌うたは、  
 なにといふ名なぞ あね君きみよ」  
 とへどいらへは ためらひて、  
 「いともかわゆき 言ことの葉はよ、  
 思おもふ心こころの かたはしも、  
 語かたりかはして なぐさまむ、  
 齡よばいにいましの なりたらば、  
 いなく、我身わがみ それよりも、

もみぢよ花はなよ 世よの中なかの、  
 うき事ことしらで、あそびてし、  
 むかしの春はるに かへりなば、  
 むかしの秋あきの かへり來こば。」  
 いかなる人ひとと ゆかしさに、  
 垣かきのひまより 見みいるれば、  
 すみれつみつゝ、花はなたばを、  
 つくる妹いもに よりそひて、  
 むすばでたれし 黒髪くろかみの、



顔かほにかゝるを かきあげて、  
にほふさくらの 下したかげに、  
たてる姿すがたの いとほしや。

梢こずえの色いろに きそふべき、

花はなのゑまひも おもやせて、

軽かろきたもとに ほろくくと、

うつるは何なにの つゆならむ。

ゆふぎり深ふかく たちこめて、

あさかせさむき 此夕このゆふべ、  
獵かりのかへさに 來きてみれば、  
ありし家居いへるは かはらねど。

門かどはよもぎに とざゝれて、

野のとなる庭にはの 茂しほぢふに、

かへらぬぬしを まつ虫むしの、

聲こゑのみしげく きこえつゝ。

かの姉妹はらからは かげもなし、



かのつま琴は おともなし、  
いづこ行きけん かの少女、  
いかにかしけん かの少女、

思ひあまりて たゞずめば、  
主人のうへをや 語るらむ、  
あれしまがきの 女郎花、  
露にしほれて たてりけり、

中野逍遙をおもひて

川べのやどに まとゐして、  
かたぶく月を あふぎつゝ、  
心しづかに かたらひし、  
四人のひとよ 今いづら。

さかゆく春を ほこるあり。  
さびしき秋を かくつあり。  
君はつめたき 世をさりて、



われはつれなき 世にぞ泣く。



明治三十八年十一月十日印刷  
明治三十八年十一月十三日發行

定價金貳十錢

著作  
所權  
有作

發兌元

著者 石橋 曉 夢

發行者 大月 隆

印刷者 青木 弘

印刷所 東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目  
株式會社秀英舎第一工場

東京市神田區錦町一丁目十六番地  
文學同志會

大阪市江戸堀上通 文學同志會大阪支部  
廣島市西横町 文學同志會中國支部

(電話本局千〇九十三番)



●●文學同志會出版圖書目錄●●

美

妙

人生の氣力

定價二十錢  
郵稅四錢

人生の初旅

定價二十錢  
郵稅四錢

人生の老旅

定價二十錢  
郵稅四錢

人生の悔悟

定價二十錢  
郵稅四錢

人生の片影

定價二十錢  
郵稅四錢

人生の目的

定價廿五錢  
郵稅四錢

人生經濟學

定價二十錢  
郵稅四錢

人生の情事

定價二十錢  
郵稅四錢

吾人の生活

定價廿五錢  
郵稅四錢

山高水長

定價二十錢  
郵稅四錢

風月萬象

定價廿五錢  
郵稅四錢

斷巖絕壁

定價二十錢  
郵稅四錢

枕頭の山水

定價二十錢  
郵稅四錢

悲哀の快觀

定價二十錢  
郵稅四錢

萬情萬眉

定價十六錢  
郵稅四錢



最近國家社會主義	斬奸狀	精神と力量	虛心談	活學談	活精神	活禪錄	禪學斷片	聖僧道元
定價六十錢 郵稅八錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價三十錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅六錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價三十錢 郵稅六錢	定價五十錢 郵稅六錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價二十錢 郵稅四錢
日佛敎拾二傑傳論	馬琴妙文集	滑稽妙文集	戲曲妙文集	吞氣文集	高等艶麗文集	立身の事蹟	研學の順序	青年の將來
定價二十錢 郵稅四錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價三十錢 郵稅六錢	定價三十錢 郵稅四錢	定價卅五錢 郵稅六錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢

作文指南	山水記事論說文	高等記事論說文	偉人の膽力	偉人の生長時代	頓才の詩人	深窓の佳人	婦人實務錄	女子講本
定價廿五錢 郵稅六錢	定價三十錢 郵稅六錢	定價三十錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價廿二錢 郵稅四錢	定價二十錢 郵稅二錢	定價三十錢 郵稅六錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價三十錢 郵稅六錢
活戀	戀と死	墳墓の地	失策の半生涯	成功秘訣	天籟萬丈	小哲學	珍嶋長明海道記	理想の大臣
定價三十錢 郵稅四錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價卅五錢 郵稅八錢	定價三十錢 郵稅六錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價十五錢 郵稅二錢	定價廿五錢 郵稅四錢



無能の天下	人情の後見	戀愛の精神	理想の政黨	軍隊の側面	成效者の苦學	加賀の千代	哲學要領	禪學の奧義
定價廿五錢 郵稅四錢	定價三十錢 郵稅六錢	定價三十錢 郵稅六錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價六十錢 郵稅六錢	定價九十錢 郵稅八錢
弱者の臨終	戀愛の文豪	婦人の情力	自然界的審美	文學の審美	人生の審美	吾家の憲法	社會學と哲學	社會學講義
定價三十錢 郵稅四錢	定價三十錢 郵稅六錢	定價三十錢 郵稅六錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價六十錢 郵稅十錢	定價五十錢 郵稅六錢

英雄の片影	心識活談	詩の神	學生の苦心	心學養性篇	心學道體篇	心學人間篇	心學道義篇	心學迷悟篇
定價二十錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價四十二錢 郵稅四錢	定價四十二錢 郵稅四錢	定價四十二錢 郵稅四錢	定價四十二錢 郵稅四錢	定價四十二錢 郵稅四錢
心學性理篇	心學明德篇	心學靈性篇	俳流の女神	箴言	高等秀才文集	奇僧の片影	高等才媛文集	風彩と審美學
定價四十二錢 郵稅四錢	定價四十二錢 郵稅四錢	定價四十二錢 郵稅四錢	定價四十二錢 郵稅四錢	定價三十錢 郵稅四錢	定價廿二錢 郵稅六錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價三十錢 郵稅六錢	定價三十錢 郵稅六錢



審美學要義	高等美文斷片	女子美文斷片	心 琴	馬琴旅行文集	秀才記事論說文	中等作文組立法	美文組立法	近松妙文集
定價三十錢 郵稅六錢	定價廿四錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅六錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價三十錢 郵稅六錢	定價三十錢 郵稅六錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢
西鶴妙文集	爲永妙文集	芭蕉妙文集	立身冒險談	名流の家憲	社會學問答	社會學と事業	軍人と膽力	軍歌集
發賣禁止	定價三十錢 郵稅六錢	定價卅五錢 郵稅六錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價三十錢 郵稅四錢	定價七十五錢 郵稅十五錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價十二錢 郵稅四錢

處世の歌	征露詩集	小學高等科 字引一學年用	全 二學年用	全 三學年用	全 四學年用	中等國語讀本 字引一學年用	全 二學年用	全 三學年用
定價三錢五厘 郵稅二錢	定價十五錢 郵稅四錢	定價二十錢 郵稅二錢	定價二十錢 郵稅二錢	定價二十錢 郵稅二錢	定價十五錢 郵稅四錢	定價廿四錢 郵稅四錢	定價廿四錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢
全 四學年用	全 五學年用	高等美文資料	殘花集	玉琴集	すみれ集	百字文集	忍ぶ草集	人生と山水
定價三十錢 郵稅六錢	定價三十錢 郵稅六錢	定價廿五錢 郵稅六錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價二十錢 郵稅四錢



テニソンの詩	琵琶歌妙文集	謠曲妙文集	婦人の美觀	婦人と家庭	婦人の使命	婦人と文學	英雄僧日蓮	新婚旅行
定價六十錢 郵稅八錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價三十錢 郵稅四錢	定價五十錢 郵稅六錢

不如歸集	靜思斷片	殘雪集
定價二十錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價十二錢 郵稅二錢





文  
乙